

中三

中村 美紀

はるばると海を越えて、この島に着いた時の私の憂愁を思いたまえ。夜なのか昼なのか、島は深い霧に包まれて眠っていた。私は目をしばたいて、島の全貌を見すかそうと努めたのである。裸の大きい岩が急な勾配を作っていくつもいくつも積み重なり、ところどころに洞窟の黒い口が開いているのがおぼろに見えた。これは山であるうか。一本の青草もない。

（太宰治「猿ヶ島」より）